

## 叙事詩の宗教哲学

— Mokṣadharmā-parvan 和訳研究 (I) —

茂木 秀 淳

インド古代において、ヴェーダの祭式解釈学から発生したウパニシャッドの思弁哲学、およびそれに対抗する仏教あるいはジャイナ教の成立するのは、紀元前五、六世紀である。その後かなりの時代を経て、紀元後二～四世紀に、バラモン正統諸学派の根本聖典であるスートラ文献が成立する。スートラは、要点を暗唱し伝承するためのもので、記述は簡潔すぎるほど簡潔である。そのためスートラの原意は時代が下がるにつれて失われることになるが、これらのスートラの原意を回復するという意図のもとに注釈を加える、あるいはスートラ解釈という形で自説を表現するという形で、多くの注釈書が書かれることになる。そのような注釈書の連続という形式をとってインド古代思想は展開した。注釈文献が多く書かれるのは、政治的にはグプタ王朝期にあたる古典文化の完成期である紀元後五、六世紀以降である。従って、ウパニシャッドの思弁哲学が成立してから諸学派のスートラが成立するまでおよそ五百年以上の期間が横たわっており、このインド思想体系化以前あるいは前後の事情は未だ明らかとなっていない。

王位継承戦争を題材にした大叙事詩『マハーバーラタ』(略号 MBh) は、紀元前後から数百年にわたって徐々に増幅され、紀元後四、五世紀には現在の形になったと推定されている。その第十二章『寂静の章』(Śānti-parvan) の最後に『解脱の法』(Mokṣadharmā) と呼ばれる紀元後二、三世紀成立と推定されている約二百章、七千を越える二行詩からなる部分がある。この箇所は、パーンダヴァ族の第一王子ユディシュティラが人生不可避の苦、輪廻転生や解脱等に関する問いを発し、戦いに傷つき瀕死の敵軍の長老ビーシュマが返答するという形式で構成されている。ビーシュマはユディシュティラの質問に応じて種々の古譚を引用したり、当時の宗教思想に言及するなどして返答する。その結果、Mokṣadharmā の内容は多岐に渡り、ある場合には一貫性に乏しく雑多な印象を与えるが、当時の宗教思想の基調をなす輪廻転生の世界観や萌芽的状态にあるサーンキヤ・ヨーガ思想や自然哲学思想への言及、カースト制や当時成立しつつあった生活期(āśrama) の記述、ヴィシュヌ神崇拜や苦行(タパス) やヨーガの実践の叙述など、全体として当時の宗教思想の集大成とも言うべき趣を呈している。

スートラ文献成立期ごろの事情を伝える文献として Mokṣadharmā はこれまで多くの研究者の注目するところとなり、先駆的な研究や翻訳も多くなされている<sup>1)</sup>が、全体が長大であり、内容が多岐にわたるために、包括的に考察を加えたものはまだ現れていない。この論文は、テキストの解説という基礎的作業を通して、Mokṣadharmā の全体的理解の足掛りとし、雑多な外見をもつ Mokṣadharmā 内部の発展段階を推定し、Mokṣadharmā を思想上の資料として活用する可能性を見出そうとするものである。

『マハーバーラタ』はインド文化の百科事典ともいべき叙事詩であり、その注釈書まで含め、多くの写本が今日まで伝承されている。そのうちの何種類かが活字化されているが、写本を網羅的に参照したプーナ校訂版の完成以後、これをテキストとして用いるのが一般的となっている。従って、解説は、プーナ校訂版（略号 P.<sup>2)</sup> に基いて行うことにする。しかし、プーナ校訂版も多くの疑問点を残しており、意味不明の箇所も多々見られる。その場合には、プーナ校訂版に網羅的に挙げられているヴァリエントを参照し、検討しなければならない。またある場合には、叙事詩の簡略な表現という特性のため、そして後代の付加増幅あるいは脱落の結果、どの伝承も明らかな意味を伝えない箇所も見られる。その場合、参考とすべき文献は『マハーバーラタ』の諸注釈書であろうが、注釈書もおよそ後代の成立であるから、必ずしも当時の意味を伝えるとは限らず、後代の目からの解釈である場合もあり得よう。しかし、そのような制約があるにせよ、注釈書をまったく無視することはできない。従って、解説にさいしては『マハーバーラタ』の代表的注釈の一つであるニーラカンタの注釈（略 N.<sup>3)</sup>）およびニーラカンタが依拠した『マハーバーラタ』の流布本（便宜上略号 D.<sup>4)</sup> と呼ぶことにする）を適宜参照し、その相違に留意しつつ進めることにする。

### 〈Mokṣadharmā 和訳〉

#### [第168章]

ユディシュティラは言った。

- (1) 王のダルマに基いた吉祥なるダルマが偉大なる父によって述べられた。王よ。生活期に生きる者たちにとっての優れたダルマを話されよ。

ビーシュマは言った。

- (2) あらゆるところに<sup>5)</sup>定められた聖なるダルマは、真実の果実であり苦行 (tapas) である<sup>6)</sup>。ダルマは多くの門をもっているので、この世において果報をもたらさない行為はない。
- (3) 導くものが<sup>7)</sup>何であれ、確固として進む人は誰でも、そのみを導くものとみなし、他を振り返らないのである。すぐれたバーラタ族よ。
- (4) 世間という織物を、空のごとく観ずるならば、観ずる程にそこで離欲 (virāga) が生じる。このことに疑いはない。
- (5) このようなあり方の誤り多き世間において、ユディシュティラよ、思慮ある人は、自己 (ātman) を解き放つ手段を探すべし。

ユディシュティラは言った。

- (6) 財産がなくなった時、妻や子あるいは父が死んだ時、いかなる意識によってか悲しみを振り払うべき、それを私に語れ、祖父よ。

ビーシュマは言った。

- (7) 財産がなくなった時、妻や子あるいは父が死んだ時、「ああ苦しい」と思念しつつ、悲しみを慰むべし (apacitiṃ caret)。
- (8) ここでも人々はこの古譚を例として語る。ある賢者がセーナジット王に語ったように。

- (9) 息子を失った悲しみによって苦しむ、悲しみに打ちひしがれ、悲しそうな顔をした王を見て、賢者は言葉<sup>8)</sup>を語った。
- (10) 『一体あなたは何故茫然としているのか。悲しまれるべきあなたは何を悲しむのか。あなたを悲しむ人々も、悲しまれるべきものとして、ある時同じ状態に至るでしょう。
- (11) あなたも、私も、あなたを敬う他の人々も、王よ、すべて我々は、まさに我々がやってきたその場所に赴くでしょう。』

セーナジットは言った。

- (12) あなたにとって、それに到達することによって悲しまなくなるような、いかなる意識 (buddhi)、いかなる苦行 (tapas)、いかなる禅定、いかなる認識 (jñāna)、いかなる聖なる知識 (śrutam) があるのか、偉大なる苦行者よ。

バラモンは言った。

- (13) 見よ、存在するもの (bhūta) はあらゆる点で苦に結びついている。この自己 (ātman) も私のものではなく、すべての大地はわたしのものではない<sup>9)</sup>。
- (14) 私のものであると同様に他人のものでもあるという意識 (buddhi) によって、私には恐れ (vyatha) はない。私はこのような意識に達して、喜ぶこともなく恐れることもない。
- (15) 大海の中で木片と木片は出会い、そして出会った後で離れるであろう。存在するものの出会いも同様である。
- (16) 子供も孫も父方の親戚、母方の親戚も同様である。彼らに対し愛着をもつべきでない。彼らとは必ず別れるのであるから。
- (17) 見えざるもの<sup>10)</sup>より生じたものは、再び見えざるものに至る。しかしこれは<sup>11)</sup>汝を知らず、汝はこれを知らない。汝は誰であり、誰を悲しむのか。
- (18) 苦は渴愛 (trṣṇā) の苦痛を源とし、楽は苦の苦痛 (duḥkhārti) を源とする。楽から苦は生じ、(そして苦は楽からというように) このようにこれは繰返される。楽の後には苦があり、苦の後には楽があるのである。<sup>12)</sup>
- (19) あなたは、楽から苦に落ちたが、再び楽を得るであろう。常に苦を得ることはなく、常に楽を得るということはない。<sup>13)</sup>
- (20) 友人は楽を得るに十分ではなく、敵は苦を得るに十分ではない。英知は、諸目的を得るに十分ではなく、財産は楽を得るに十分ではない。
- (21) 知識は財産を獲得するのに十分ではなく、愚かさは貧困を得るに十分ではない。世間の巡る道筋を賢者は知るが、他の(愚かな)者は知らない。
- (22) 知恵ある人にもぼんやりした人にも、勇敢な人にも臆病な人にも、愚か者にも賢者にも、力弱き人にも力強きにも、安楽は分かち与えられる。
- (23) 牛は子供にも属し、牛飼いにも属し、金持ちにも属し、泥棒にも属す。牛の乳を飲む人が、それぞれその牛の持ち主である、と定まっている。
- (24) 世間でも最も愚かな人と、認識 (buddhi) の高所に至った人々<sup>14)</sup>は、安楽を増大させ、中間にいる人は苦しむ。

- (25) 確固たる人々は究極において満足し、中間において満足しなかった。究極に達することを楽 (sukhām) と言い、両端<sup>15)</sup>の中間を苦と言った。
- (26) そして認識の楽 (buddhisukha<sup>16)</sup>) に達し、相対的な対立を越え、羨みの念なき人々を、価値あること (arthāḥ) も無価値なこと (anarthāḥ) も動揺させることは決してない。
- (27) 認識 (buddhi) に到達しない人々や過度に愚かな人々は (vyatikrāntāḥ mūḍhātām) 度を越して喜んだり、悲嘆にくれたりする。
- (28) いつも満足している愚かな人々は、天界における神の群のごとく、大きな自惚れにとりつかれ<sup>17)</sup>、その心は定まらない。
- (29) 楽な怠惰は苦に終り、苦しい勤勉は楽を生ずる。幸福は富とともに勤勉の中に存し、怠惰の中にはない。
- (30) 仮に楽が得られたならば、あるいは苦、あるいは厭うべきもの、あるいは善きものが得られたならば、心によって征服されることなく<sup>18)</sup>、得られたものに近づくべし。
- (31) 千の悲しみの状態と百の喜び<sup>19)</sup>の状態は、毎日毎日愚かな者に入り、賢者に入ることはない。
- (32) 知識をもち、英知を完成し、教えを聞かんと欲し、悪意なく、温和な、感官を制御した人にも、悲しみは触れることはない。
- (33) 知恵ある人は、この認識に依拠して (samāsthāya)、心を隠して振舞うべし。(世界の) 生成消滅を知る者に<sup>20)</sup>、悲しみは触れることはできない。
- (34) ある原因から悲しみや恐れ、苦や苦痛は生ずる。原因となるものをその部分さえも捨てるべし<sup>21)</sup>。
- (35) 欲望に関するものを捨てれば捨てるだけ、楽に関するものが増える。欲望に従う人は、欲望に従って滅びる。
- (36) この世界での欲望の安楽と神々の大きな安楽の両者は、渴愛の滅による安楽の十六分の一にも及ばない。
- (37) 前世の身体によって為された善きあるいは悪しき行為が、為されたごとく、賢者や愚者に、そしてまた、勇者にと分けるのである。
- (38) このようにして実に、愛しきことと厭わしきこと、そして楽と苦は、個我 (jiva) において、巡るのである。
- (39) このように意識を定めて、徳のある人は安楽に生きるべし<sup>22)</sup>。あらゆる欲望を隠すことを願うべし。執着を<sup>23)</sup>捨てるべし。これは心の中に存在し、成長する。これは心の死 (eṣa mṛtyur manomayaḥ) である<sup>24)</sup>。
- (40) 亀が完全に四肢を引っ込めるように、欲望を完全に捨てる時、自己を光とする自己は、自己において清浄となる<sup>25)</sup>。
- (41) 何かあるものが自分のものとして考えられる時、そのものはすべて苦しみのためのものとなる。
- (42) あるものが恐れず、恐れられず、何も望まず嫌わない時、彼はブラフマンとなる。
- (43) 真と偽、悲しみと喜び、恐れと恐れなきこと、愛しきものと厭うべきものという両者

を捨てた後、汝は寂靜なる自己をもつであらう。

(44) 確固として、あらゆる存在に対し罪深きことをしない時、行為によって、心によって、言葉によってブラフマンとなる。

(45) もろもろの誤った考えによっては捨てるに難しく、老人においても老いることもなく、この生命 (prāṇa) を終らせる病である渴愛、それを捨てる人に安樂はある。

(46) この点について、王よ、ピンガラーによって歌われた詩節 (gāthā) が伝わっている。ピンガラーは苦難の時においてさえ、永遠なるダルマを獲得した。

(47) 娼婦ピンガラーは、逢い引きの約束の時、夫に捨てられた。そして、その時苦しんだピンガラーは意識を静かに落ち着かせた。

ピンガラーは言った。

(48) 『恋に酔った (unmattā) 私は、冷めた (anumatta) 愛人に長い間従った (anva-vasam)<sup>26)</sup>。近くに<sup>27)</sup>愛する男がいてもこれまで近づくことはなかった。

(49) 私は1本の柱と九つの門をもつ家を閉じよう。ここにやってきた男<sup>28)</sup>を、これが愛する者であると一体誰が考えるようか。

(50) 愛神カーマの姿によって騙す愛情のない<sup>29)</sup>、悪魔ナラカの姿のものたちが、再び私を騙すことはないであろう。私は悟り、目覚めている。

(51) 価値なきことも運命や前世に為された行為によって価値あるものとなる。目覚めた私には定まった姿なく (nirākārā), 私は今や感官を制御できない者ではない。』

(52) 望みなき人は安樂に眠る。望みなきことが最高の安樂である。望みを望みなしとして、ピンガラーは安樂に眠る。

ビーシュマは言った。

(53) 賢者のこれらや他の理由ある言葉によって満足せしめられる王セーナジットは歓喜し満足した<sup>30)</sup>。

### [第169章]

ユディシュティラは言った。

(1) あらゆるものを消滅へと運ぶこの時間が過ぎ去る時に、何を優れたものと理解すべきか。それを語れ、祖父よ。

ビーシュマは言った。

(2) ここでも人々はこの古譚を例として語る。父と子の対話、それを聴け、ユディシュティラよ。

(3) プリターの子よ、ヴェーダの吟誦に専心しているある再生族にメーダーヴィン (知恵をもったもの) という名前からして賢明な息子がいた。

(4) ヴェーダの吟誦に専心している父に、解脱・ダルマ・財産 (という目的) に能力ある<sup>31)</sup>、世間のあり方 (lokatattva) に通じたこの息子は言った。

(5) 『父よ、賢明にして認識をもつものは何を為すべきか。なぜなら、人間の寿命はすぐに消えるのであるから。父よ、それによって我がダルマが行なわれるべきものを、正し

く<sup>32)</sup>、順に従って私に語るべし。』

父は言った。

- (6) 息子よ、梵行によってヴェーダを学び、祖先を浄化するため息子を望むべし。祭火を設置して儀軌に従って祭式を行なった後、森に入り、そこで聖者 (muṇi) とならんと願うべし。

息子は言った。

- (7) このように世間が襲われ、完全に囲まれている時、空虚ならざるもの<sup>33)</sup>が過ぎ行く時に、どうしてあなたは賢者のごとく語るのか。

父は言った。

- (8) 何故、世間は襲われているか、あるいは何によって囲まれているのか。いかなる空虚ならざるものがこの世で過ぎ行くのか。実に汝は余を脅かしているかのごとくである。

息子は言った。

- (9) 世間は死によって襲われ、老いによって囲まれ、(そこでは)この昼と夜が過ぎ去っていく。(これらのことに)何故、あなたは気がつかないのか。<sup>34)</sup>

- (10) 死はとどまっていないと、このように私が知った時、その私がどうして、網<sup>35)</sup>に覆われて行動しつつ、(死を)待つことがあろうか。

- (11) 夜が次々と去っていくなか、命はより短くなる。その時、浅い水にいる魚のごとく、誰が安楽を見出そうか。賢者はそのように (tad eva) 一日についても虚しきものと知るべし<sup>36)</sup>。

- (12) もろもろの欲望が達成されていなくとも、死は人に近づく。芽ぶいた草<sup>37)</sup>を探すように心が他に行っている人を、雌狼が羊を襲い奪って去るように、死は襲い奪って去る。

- (13) 今ここかのすぐれたことを為せ。この時間が汝を越えて行かないように。為すべきことが為されていない時、死は(人を)引きずっていく。

- (14) 明日できることは、今日為すべし。午後できることは午前に為すべし。なんとなれば死は、それが為されようと、あるいは為されていないかろうと待つことはない故。誰に今日死の軍勢が向うか<sup>38)</sup>、誰が知ろうか。

- (15) 若者こそダルマをそなえるべし (dharmaśīlaḥ syād)。なぜならば生命は(それを長くする)原因がないから<sup>39)</sup>。ダルマが為されれば、現世では名誉 (kīrti) が、死後は安楽が生じるであろう。

- (16) 迷盲にとりつかれた人は、子と妻の為に働き、為すべきことを為すべきではないと考え、彼らに富を与える。

- (17) この子供と家畜のことばかり考える混乱した心の人を、眠っている虎を洪水が奪って去るように<sup>40)</sup>、死は奪って去る。

- (18) もろもろの欲望が集積され、満足させられていない人を (ekam) 虎が家畜を奪って去るように、死は奪っていく。

- (19) 「これは為された。これは為されなければならない。これは完全に終わっていない。」とこのように、願望と安楽に執着している人を死 (kṛtānta) は征服する。

- (20) 為された行為の結果を獲得しておらず、結果に固執し<sup>41)</sup>、土地と品物と家に執着している人を、死は奪っていく。<sup>42)</sup>
- (21) 死、老、病そして数多くの原因をもつ苦が身体に付着している時、どうしてあなたは満足しているかのごとく (svastha iva) 存在できようか。
- (22) 死、そして死へと向ける (antāya) 老は生まれたもの (個我 dehin) に随行する。両者 (死と老) によって、これら動くものと動かぬもの (bhāva) はつき従われている。
- (23) 村に住む者の歓喜はまさに死の家である。森<sup>43)</sup>は神々の集うところ、と聖典に伝えられている。
- (24) 村に住む者の歓喜はこれ束縛する綱である。行い善き人はこれを切って進み、行い悪き者はこれを切らない。
- (25) 心、言葉、身体を原因とし、生命と財産を奪う<sup>44)</sup>行為によって、生命をもつもの<sup>45)</sup>を殺さない人は束縛されることはない<sup>46)</sup>。
- (26) 真実 (satya) なしに、何者も近づきつつある死の軍勢を阻止することはできない<sup>47)</sup>。(真実は) 捨てるべきではない。なぜならば不死は真実の中にある故。
- (27) 従って、真実の誓いを遂行し、真実のヨーガを最高の道とし、真実を喜びとし<sup>48)</sup>、平静にして自らを制御する<sup>49)</sup>人は、真実によってこそ死に勝つべし。
- (28) 死と不死の両者は一つの身体の中に存在する。迷いによって死が得られ、真実によって不死が得られる。
- (29) 危害を加えず、真実を求め、欲望と怒りを捨て、苦と楽を等しく見、平安にいる私は、不死者 (amartya) のごとく、死より離れるであろう。
- (30) 寂静の祭式<sup>50)</sup>に満足し、自らを制御し、ブラフマンの祭式<sup>51)</sup>に住し、言葉・心・(身体的) 行為を祭式とする賢者として、私は太陽の北行する道に<sup>52)</sup>赴くであろう。
- (31) そのような私が、どうして殺生を伴う獣供犠祭によって祭るべきであろうか。あるいは<sup>53)</sup>どうして賢者が、悪鬼ビシャーチャのごとく、限界ある、力の祭式<sup>54)</sup>によって祭るべきであろうか。
- (32) 言葉と心が常に正しく確定されており、苦行 (tapas)・棄却 (tyāga)・ヨーガが常に正しく確定されているならば、その人は一切を獲得するであろう。
- (33) 知識 (vidyā) にすぐる目はなく、知識にすぐる力はない。執着にしく苦はなく、棄却にしく安楽はない。
- (34) 自己において、自己によって生まれ、自己に住する私は、子孫はなくとも、自己において生じるであろう。子孫は、私を救済するものではない。
- (35) 唯一性、平等性、真実性、戒の遵守<sup>55)</sup>、寛容、正直、そしてさらに行為の停止にしく財産はバラモンにはない。
- (36) バラモンよ、いずれ死ぬあなたにとって、財産、親戚、妻が何の役にたとうか。(心臓の) 洞窟に<sup>56)</sup>入りたる自己 (ātman) を探すべし。あなたの祖先そして父はどこへ行ったか。

ビーシュマは言った。

- (37) 王よ、息子のこの言葉を聞いた後、父はそのようにした。同様に汝もまた、真実のダルマを最高の道として生きよ。

[170章]

ユディシュティラは言った。

- (1) 人々は裕福にしても、あるいは貧しいにしても<sup>57)</sup>、それぞれの流儀で (svatantrin)<sup>58)</sup> 生きている。この人々にいかなる楽と苦が、どのようにやってくるのか、祖父よ。

ビーシュマは言った。

- (2) ここでも、この古い物語を例として人々は語る。解脱して、寂靜にいたったシャムヤーカによって<sup>59)</sup>歌われた物語を。
- (3) 悪しき妻と悪しき着衣と空腹によって悩まされていた、棄却を實踐する<sup>60)</sup>あるバラモンがかつて私に語った。
- (4) この世界に生まれた人間に、誕生以後様々な苦と楽が展開する。
- (5) その両者のいずれか一方の道において、もしそれを得ようとするならば<sup>61)</sup>、楽を得ても喜んではならず、苦を得ても苦しんではならない。
- (6) 汝は何かすぐれたことに至っていない。あるいは自分の望むこと<sup>62)</sup>に至っていない。なぜならば自己に欲望はなくとも常に軛を上げなければならないから。
- (7) 何も所有せず、歩き回るならば、汝は安樂を享受するであろう。何も所有しない者は、安樂に横たわり、また立上がる。
- (8) 無所有はこの世における安樂であり、それは、道理にかなない吉祥にして病なきものである。敵なき者をうちこわすものにとって得るに難しいものは、善き人々にとっては得るに易しい<sup>63)</sup>。
- (9) 私が三界を見渡す時、何ももたず清淨にしてあらゆる点で<sup>64)</sup>完成した人に匹敵するもの見出すことはない。
- (10) 私は無所有と王位とを天秤によって計った。徳の多い貧しさは王位よりも勝っていた。
- (11) 無所有と王位にはこのように大きな相違がある。財産ある人は常に恐れ、あたかも死が顔にあるようである。
- (12) この財産と老いから解放され<sup>65)</sup>いかなる望みももたない人にとって、火も太陽も<sup>66)</sup>死もおいはぎどもも存在しない。
- (13) この常に自由に動き、敷物なしに眠り、腕を枕とする寂靜なる人を空を住み家とする神々は讃える。
- (14) 怒りと貪欲につきまわれ、心は滅び、物を横目で見、口の乾いた、罪深い、まゆをひそめた顔をした裕福な人を。
- (15) 下唇を噛み<sup>67)</sup>、怒っばい、しゃがれ声で話すこの (裕福な) 人を、誰が見ることを願おうか。彼が仮に大地を与えることを望んでいるとしても。
- (16) いつも富 (śrī) と共にいることは、愚かな人を迷わせる。富は、あたかも風が秋の

雲を奪いさるるように、愚かな人の心を奪いさる。

- (17) また姿の自慢と財産の自慢とが、この人のところにやってくる。私は高貴な家に生まれ、私は成功し、私はただの人 (kevalamānuṣa) ではないという三種の理由で彼の心は満たされるのである<sup>68)</sup>。
- (18) その心満たされた人<sup>69)</sup>は、父によって集められた財産を浪費し (bhogān visṛjya)<sup>70)</sup>、無一文になると他人の財産をとることを正しいと考える。
- (19) 彼が限界を越えてあちらこちらから取ると、王たちは罰する (pratiṣedhanti)<sup>71)</sup>。あたかも獵師たちが鹿を矢で射るがごとくに。
- (20) このように、この世ではこれらの苦に多くの種類があり、また苦は身体の接触から生じるが、ある場合にこれまたある場合にはこれというように、人に近づくのである<sup>72)</sup>。
- (21) この必然的な (dhruvāṇām)<sup>73)</sup>最大の苦を認識 (buddhi) して、世間のダルマをよく知った上で<sup>74)</sup>、付随的な苦と共にそれらに対する対抗手段を講ずべし (bhaiṣajyam caret)。
- (22) 棄却なくして安楽は得られない。棄却なくして最高のものは得られない。棄却なくして恐れなく横たわることはできない。一切をすてて安楽なるものとなるべし。
- (23) このように、かつてバラモン・シュムヤーカ<sup>75)</sup>はハスティナープラにおいて私に語った。従って、棄却は勝れたものと考えられる。

(注)

- 1) 筆者が参照できた論文・翻訳は以下のものである。
- P. Deussen und O. Strauss, Vier philosophische Texte des Mahābhāratam, Leipzig, 1906.
- E. Frauwallner, 'Untersuchungen zum Mokṣadharmā. Die nicht-sāṃkhyistischen Texte' JAOS 45, 1925 pp. 51-67.
- E. Frauwallner, 'Untersuchungen zum Mokṣadharmā. Die sāṃkhyistischen Texte,' WZKM 32, 1925 pp. 179-206.
- E. Frauwallner, 'Untersuchungen zum Mokṣadharmā. Das Verhältnis zum Buddhismus' WZKM 33, 1926 pp. 57-68.
- E.H. Johnston, Early Sāṃkhya, London, 1937.
- J.A.B. van Buitenen, 'Studies in Sāṃkhya(I)', JAOS 76, 1956 pp. 153-157.
- J.A.B. van Buitenen, 'Studies in Sāṃkhya(II)', JAOS 77, 1957 pp. 15-25.
- J.A.B. van Buitenen, 'Studies in Sāṃkhya(III)', JAOS 77, 1957 pp. 88-107.
- F. Edgerton, Beginnings of Indian Philosophy, London, 1965.
- Ramsresh Pandey, Mahābhārata aur Purāṇoṃ meṃ Sāṃkhyadarśan, Delhi, 1972.
- A. Wezler, "Die wahren Speiseresteesser (Skt. vighasāśin)", Mainz, 1978.
- 池田澄達『摩訶婆羅他の研究—解脱法品の哲学—』(遺稿) 1956.
- 中村 元「生活者の倫理—マハーバーラタにおける主張」法華文化研究第3号 1977 pp.1-97.
- 原 実『古典インドの苦行』春秋社 1979.
- 村上真完「無欲と無所有—マハーバーラタと仏教(一)」東北大学文学部研究年報第29号 1979

pp.140-212.

徳永宗雄「同語反復表現に見られるインド的思惟の特質」哲学研究第557号 1991 pp.429-467

- 2) The Mahabharata vol.15 the Śāntiparvan part III : Mokṣadharmā, for the first time critically edited by S. D. K. Belvalkar, 1954, Poona.
- 3) Sriman Mahābhāratam 7vols, reprint 1988 by Nag publishers, Delhi.
- 4) P. で用いられている略号 Dn : Devanāgarī Version of Nilakaṇṭha による。
- 5) P. sarvata N. sarvatrāśrameṣu
- 6) P. satyaphalaṃ tapaḥ D. saty apretya tapaḥ phalam cf. sarvatra vihito dharmāḥ satyaphalodayaḥ / (Mdh. 12. 340. cd)
- 7) P. vinaye D. viṣaye
- 8) P. vacas D. suhṛd
- 9) D. 版は cd 句の前に, uttamadhamamadhyani teṣu teṣu iha karmasu / を挿入し第13詩としている。「上・中・下に存在する物 (bhūta) は, それぞれ, この世における行為において, あらゆる点で苦に結びついている, と見よ。」
- 10) P. adarśana N. は純粹な精神 (śuddhacinmātra) と解する。
- 11) N. は「これ」を息子と解する。
- 12) D. はこのあとに次の詩句を挿入している。  
sukhaduḥkhe manuṣyāṇāṃ cakravat parivartataḥ /
- 13) D. は次の第20詩節との間に, 以下の詩節を挿入している。  
śarīram evāyatanam sukhasya duḥkhasya cāpyātanam śarīram /  
yad yac charīreṇa karoti karma tenaiva dehī samupāśnute tat /  
jīvitam ca śarīram ca jātyaiva saha jāyate /  
ubhe saha vivardhete ubhe saha vinaśyataḥ /  
snehapāśair bahuvidhair āviṣṭaviṣayā janāḥ /  
akṛtārthāś ca sīdante jalaiḥ saikatasetavaḥ /  
snehena tilavat sarvaṃ sargacakre vipiḍyate /  
tilapiḍair ivākramya klaiśair ajñānasambhavaḥ /  
saṃcinoty aśubham karma kalatrāpekṣayā naraḥ /  
ekaḥ kleśān avāpnoti paratreha ca mānavaḥ /  
putradārakutumbesu prasaktāḥ sarvamānavāḥ /  
śokapaṅkārṇave magnā jirṇā vanagajā iva /  
putranāśe vittanāśe jñātisambandhinām api /  
prāpyate sumahaduḥkham dāvāgnipratimam vibho /  
daivāyattam idaṃ sarvaṃ sukhaduḥkhe bhavābhavau /  
asuhṛtsasuhṛś cāpi saśatrur mitravān api /  
saprājñāḥ prajñayā hino daivena labhate sukham /
- 14) N. nirvikalpasamādhiṣṭhāḥ
- 15) P. antayoḥ D. antyayoḥ
- 16) N. buddhisukham buddheḥ paraṃ sukham svarūpasukham
- 17) P. paridr̥bdha D. paribhūtyā
- 18) N. hṛdayena harṣaśokamayena
- 19) P. harṣa- D. bhaya-

- 20) P. udayāstamayajña N. jagadutpattilayasthānaṃ brahmā tajjñam yuktacittatvāt  
 21) D. はこのあとに P. の第41詩節を挿入している。  
 22) P. buddhim āsthāya sukhaṃ jived D. buddhiṃ samāsthāya sukham āste  
 23) P. saṅgān D. kāmāt  
 24) D. eṣa mṛtyur manobhavaḥ (N. manobhavaḥ kāmāḥ)  
 D. はこのあとに、次に詩節を挿入している。  
 krodho nāma śarīrastho dehināṃ procyate budhaiḥ /  
 25) P. prasidati D. prapaśyati  
 26) Deussen, op. cit., “gehegt”  
 27) P. antike N. antike hṛdayakoṣe  
 28) P. ihāyantaṃ N. iha hārdākāṣe āyantaṃ cinmātrarūpenāvīrbhāvaṃ  
 29) P. akāmāḥ D. akāmāṃ  
 30) P. mumude sukham D. mumude sukhi  
 31) P. mokṣadharmārthakuśalāḥ この合成語について N. は次のように解釈している。  
 N. mokṣadharmāṇām artheṣu kuśalāḥ  
 32) P. yathārthayogaṃ N. phalasambandham anatikramya  
 33) P. amoghāsu N. amoghāsv āyurharaṇena saphalāsu rātriṣu  
 34) D. はこのあとに次の詩節を挿入している。  
 amoghārātrayaś cāpi nityam āyānti yānti ca /  
 35) P. jālena D. jñānena  
 36) D. は詩節の順序が逆転している。  
 tadaivaṃ vandhyaṃ divasam iti vidyād vicakṣaṇaḥ /  
 gādhodake matsya iva sukhaṃ videta kas tadā /  
 37) P. śaspāṇi D. puspāṇi  
 38) P. mṛtyusenā nivekṣyate D. mṛtyukālaḥ bhaviṣyati  
 39) P. animittaṃ hī jivitaṃ D. anityaṃ khalu jivitaṃ  
 N. animittam iti pāṭhe āyur iyattāvadhāraṇakāraṇahinam  
 40) P. suptaṃ vyāghraṃ mahaugho vā mṛtyur ādāya gacchati /  
 D. suptaṃ vyāghro mṛgam iva mṛtyur ādāya gacchati /  
 41) P. phalasaṅgitam D. phalasaṃjñitam  
 42) D. はこの後に、次の詩節を挿入している。  
 durbalaṃ balavantaṃ ca sūraṃ bhīruṃ jadaṃ kavim /  
 aprāptam sarvakāmārthān mṛtyur ādāya gacchati //  
 43) N. araṇyaṃ viviktadeśaḥ  
 44) P. jivitārthāpanaiḥ N. jivitam arthāṃś ca 'panayanti yair  
 45) P. prāṇān D. jantūn  
 46) P. karmair na sa badhyate D. prāṇabhir na sa hiṃsyate  
 47) P. prabādhate D. prabodhate  
 48) P. satyārāmaḥ D. satyāgamaḥ  
 49) P. samo dāntaḥ D. sadādāntaḥ  
 50) N. nivṛttimārgābhyāsaḥ  
 51) N. nityam upaniṣadarthacintanaṃ  
 52) P. udagāyane N. udagāyane iti devayānapathanimittaṃ

- 53) P. uta D. iva  
 54) P. kṣatrayajñaiḥ D. kṣetrayajñaiḥ N. kṣetrajñaiḥ śariatyāgaiḥ  
 55) P. śīle sthitir D. śīlam sthitir  
 56) N. gūhaṃ buddhiṃ  
 57) P. vādhana D. cādhanā  
 58) N. svatantriṇaḥ vasastraṇusāriṇaḥ  
 59) P. śamyākena D. śampākena  
 60) P. tyāgam āsthitaḥ D. tyāgam āśritaḥ  
 61) P. yady enam abhisannayet D. yad enam abhisannayet  
 N. abhisannayed daivaṃ yadi prāpayet  
 62) P. yad ihase D. yad īśise  
 63) P. anamitramatho hy etad durlabhaṃ sulabham satām //  
 D. anamitrapatho hy eṣa durlabhaḥ sulabho mataḥ //  
 64) P. sarvaśaḥ D. sarvataḥ  
 65) P. dhanajyānirmuktasya D. dhanatyāgād vimuktasya  
 66) P. cādityo D. cāriṣṭo  
 67) P. nirdaṃśaṃś cādharoṣṭhaṃ D. nirdaśann adharoṣṭhaṃ  
 68) P. prasicyate D. pramādyate  
 69) P. sa prasiktamanā D. samprasaktamanā  
 70) N. bhogān bhogyadhanādīn viṣṭya vyayikṛtya  
 71) N. pratiṣedhanti daṇḍayanti  
 72) P. upavartante D. upapadyante  
 73) N. dhruvāṇām avaśyaṃ bhāvinām  
 74) P. lokadharmam samājñāya D. lokadharmam avajñāya N. avajñāya dhikkṛtya  
 75) D. śampākena

(1992年10月30日 受理)